

# 介護職員自己評価表

2025年9月25日

事業所名	認知症対応型共同生活介護 グループホーム瀬々串		正社員	非常勤社員
		介護支援専門員	1人	
		介護福祉士 実務者・初任者研修	5人 4人	3人

※複数資格者含む

## ◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備 考
前回の課題に関する改善	17.0%	51.1%	21.6%	10.2%	

前回の改善計画	
ご入居者とスタッフが自然に関わり暮らせる環境整備に努めた。暮らしに意欲をもっていただけるように、ご入居者の生活リズムを踏まえた活動と役割を提供する計画とした。家庭的な雰囲気を感じられる雑談が飛び交うコミュニティを目指し、ちょっとした短い声掛けや短い会話がケアのなかで繰り返される支援を計画とした。日中の活動性が高まると良質な睡眠につながる傾向があり、楽しんで身体を動かし筋力やバランスの維持向上に寄与するレクリエーション活動を計画した。軽いストレッチにつながる体操や脳トレ、手先をつかう巧緻作業など、記憶力や集中力の維持に効果があることから、運動と脳トレを組み合わせた二重課題（コグニサイズ）を午前と午後に戻らず提供するなど、認知症予防につながるケアを提供する計画とした。	
前回の改善計画に対する取組み結果	
日中の活動性を高めるケアの提供により生活リズムを整え、日常生活動作を活かした生活リハビリにより機能を高め、ちょっとした短い声掛けや短い会話のあるケアに努め、雑談と落ち着きのある暮らしを目指した。家庭的な雰囲気につなぐことはできたものの、フリー業務を担うスタッフは少なく、デイサービスにあるパブリックスペースを活用したイベントや有酸素運動の提供はできず、日中の活動性を高めて生活に意欲をもってもらうレベルには達しなかった。施設内のレクリエーション活動に小集団で行う低負荷の運動を取り入れ、活動性を高める必要があった。日々のケアは多岐にわたりスタッフ業務はタイトな傾向にあり、主任によるスーパービジョンが必要であった。	

## ◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合 計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	12.5%	50.0%	37.5%	0.0%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	12.5%	50.0%	37.5%	0.0%	100%
SECTION 3	食事について	25.0%	50.0%	12.5%	12.5%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	12.5%	62.5%	12.5%	12.5%	100%
SECTION 5	排泄について	12.5%	62.5%	12.5%	12.5%	100%
SECTION 6	入浴について	12.5%	62.5%	12.5%	12.5%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	12.5%	62.5%	12.5%	12.5%	100%
SECTION 8	服薬について	25.0%	50.0%	12.5%	12.5%	100%
SECTION 9	意思疎通について	12.5%	50.0%	25.0%	12.5%	100%
SECTION 10	行動障害について	25.0%	25.0%	37.5%	12.5%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	25.0%	37.5%	25.0%	12.5%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	
評価項目で「できている」と答えたスタッフは、「対象者の接し方や態度」62.5%、「仕事上の態度」62.5%、「食事」75.0%、「移乗や移動」75.0%、「排泄」75%、「入浴」75%、「着替えや整容」75%、「服薬」75%、「意思疎通」62.5%、「行動障害」50%、「普通の生活やアクティビティ」62.5%であった。比較的活動できる入居者が多く、暮らしを支えるケアが中心であった。身体を動かす体操や脳トレで日常生活動作を訓練し、生活リズムが整った暮らしが提供できた。一方、「できていない」と答えたスタッフは、「対象者の接し方や態度」37.5%、「仕事上の態度」37.5%、「食事」25%、「移乗や移動」25%「排泄」25%、「入浴」25%、「着替えや整容」25%、「服薬」25%、「意思疎通」37.5%、「行動障害」50%、「普通の生活やアクティビティ」37.5%であった。主任を中心に、服薬に関する研修で知見を深め、経験の浅いスタッフに向けたスーパービジョンをおこなう必要があった。	
主任 和田 裕貴	

外部評価者	
こちらの事業所は、活動性が高く、比較的活発に行動される入居者が多いようですが、中等度の認知症が多くを占め、帰宅願望や介護拒否等に苦慮するケースがみられるようです。日常生活では、過剰な介助を避けて、食器を並べるなどの食事の準備、おしぼりをたたむなどの役割意識の向上、残存機能を活用した入浴動作など、適切な生活リハビリにより活動量を確保し、可動域の維持につなげていました。身体機能にくわえて意欲への影響を見据えたケアは評価に値します。生活リズムの安定は、尊厳を保ち、QOL向上に寄与するかと思われます。この取り組みを継続してください。行動障害を示す入居者とのコミュニケーション、家族とのコミュニケーションが難しいと捉えている傾向がありました。主任によるスーパービジョンやOJT等で介護職員の課題に向き合っていました。4割ほどの介護職員ができていないと感じていました。経験が問われる課題です。粘り強く対応してください。一方、家族とのコミュニケーションは、入居者の生活満足度に直結します。家族との関係性は十分確保され良好なようですが、入居者と家族との関わり、入居者の心理的な安心感、施設生活の快適性、不安やストレスに影響する部分です。ケアマネ等と一緒に関わるなど、接触回数を増やしてみるのも良いかもしれません。総合的な評価は、入居者に合わせたケアが適切に提供されていることが確認できました。今後も、地域に根ざした、家族との関係性を大切にしたい事業所として頑張ってください。	
〒891-0151 鹿児島市光山2丁目3-15-6 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 博士(社会福祉学) 岩崎 房子	

